御茶屋絵図から見た福岡藩御茶屋の空間・意匠構成

福岡藩御茶屋に関する研究 (1)

THE SPATIAL COMPOSITION AND DESIGN OF O-CHAYA
IN FUKUOKA DOMAIN BASED ON DRAWINGS

A study on the o-chaya in Fukuoka domain Part 1

安高尚毅*, 宮本雅明**

Naoki ATAKA and Masaaki MIYAMOTO

The purpose of this study is to clarify architectural feature of *o-chaya* in Fukuoka domain. This study is based on Utino, Akama, Yamae's drawings. This study gives attention to the outer building and the inner building and design. As a result, site plan and building plan have many points in common. Three *o-chaya* divide into four parts in terms of space and design. *O-genkan* part is traffic place whose design is *syoin*. *O-hiroma* part is meeting place whose design is informal *syoin*. *O-ima* part is resting place whose design is like *sukiya*. *Tumesyo-daidokoro* part is cooking and administration place whose design is like *minka*.

Keywords : *O-chaya, Fukuoka domain, Utino, Akama, Yamae*

御茶屋、福岡藩、内野、赤間、山家

序

近世の御茶屋と呼ばれたものには様々な用途、規模、形式のものが存在した。御茶屋を建設した者も宮家、公家、武家と多様な階級に亘っていた。文献史料に見られる御茶屋の語も本陣や町茶屋の意味に使用されるなど、その解釈は諸書で混乱が見られる。川上貢氏は、御茶屋は「ある特定の人の専用施設として庭間の散策または旅行などの道程の中途に位置して、飲食、休息または宿泊に充てるためのもの」と概括されると言う^{注1)}。この様に広範に及ぶ御茶屋の意味の中で、本稿の御茶屋は將軍の上洛、遠征、大名の参勤交代、領内巡見の休憩・休泊施設として設けられた武家の御茶屋を指す。

これまで武家の休泊に使用された御茶屋の研究は交通史・歴史地理・建築史の立場から研究されている。

交通史では丸山雍成氏が近世宿駅に関する宿・本陣・御茶屋の関係性と、歴史的変遷を考察している^{注2)}。丸山氏は御茶屋が領主的交通の休泊機能を遂行し、江戸中期以降五街道では御殿御茶屋は消滅し、御茶屋が本陣にその機能を移行・転化し、脇街道では御茶屋と本陣の両性格を併有したという。

一方、歴史地理では中島義一氏が將軍の御殿御茶屋に着目し、御殿御茶屋が大名の宿泊を許さず、將軍自身は本陣を利用しておらず、これらの用途は異にして併存したとする^{注3)}。

丸山氏は武家の休泊施設が藩営から民営へ移行したことに重点を置き、中島氏は使用者の違いから用途が別になることに重点を置くこと

から、これらの説の違いは研究分野によるものと考えられる。

交通史・歴史地理の先行研究に共通することは御茶屋を単なる休泊施設として捉えている点である。御茶屋と本陣が異なる目的で建設されたのであれば、単なる休泊施設として捉えるのではなく、その奥にある意味が重要であろう。また、御茶屋と本陣の定義も空間に裏付けられること、つまり建築史的な検討が必要であると考えられる。

建築史の先行研究は、川上貢、岡田悟氏の研究が代表される^{注4)}。川上氏は將軍家が設けた永原御茶屋について、平面構成を中心に検討している^{注5)}。岡田氏は萩藩^{注6)}と庄内藩^{注7)}の複数の御茶屋について主に平面構成を検討しながら、使用状況も検討している。

岡田氏は萩藩の御茶屋は藩主が国廻り時に御茶屋に宿泊したこと、平面の基本構成要素を番所部分・御座間部分・台所部分の3つとすること、勘場と呼ばれる役所が、御茶屋の敷地に隣接して設けられている所があることを明らかにし、庄内藩では藩主が御茶屋に、他藩藩主は本陣に宿泊し、平面の基本構成要素を番所広間部分・御居間部分・台所部分の3つとすることを明らかにしている。

建築史においてはそれぞれ詳細な分析を行っているが、室名と間取りしかわからないという史料の制約から空間・意匠構成に関してはそれほど深く検討されていない。また岡田氏は萩藩、庄内藩を集中して取り扱い、藩全体の御茶屋の状況を把握することが重要であるとしつつも、現段階では御茶屋を個別に研究するに留まり、総体的に萩藩・庄内藩の御茶屋像を結んでいないように思われる。平面の区分も室名

本稿は、『日本建築学会九州支部研究報告集(計画系)』(2005年)に発表した内容をもとに加筆・修正したものである。

* 東和大学環境デザイン工学科 講師・芸工修

** 九州大学大学院芸術工学研究院 教授・工博

Lecturer, Tohwa University, M. Design

Prof., Faculty of Design, Kyushu University, Dr. Eng.

から機能を類推し区分しており、必ずしも厳密な区分とは言えない。区分は外部空間を対象としておらず、後述するように内外部を一体的に捉えることが重要である。また御茶屋という建築形式は全国共通なのか、または藩によって特徴があるのかという問題も考えられ、より一層の研究の深化が求められる。

ところで、福岡藩にはこの様な諸問題に答えうる史料が残される。残される史料の中でも文化八年（1811）の「内野御茶屋絵図」^{注8)}、天保五年（1834）の「赤間御茶屋御家通図」^{注9)}、「御茶屋々々御家坪数其外口々書留メ在役衆役宅坪数共」（「御茶屋書留」と呼ぶ）^{注10)}が特に重要である。

「内野御茶屋絵図」「赤間御茶屋御家通図」は外構と建築の全体を極めて詳細に描き、建築物や工作物の仕様まで記述しており、部屋名、建具の種類、床仕上、天井仕上、壁仕上、屋根仕上が知られる。これにより内部と外部との空間の関連性と空間構成が把握でき、意匠構成も検討できる。平面だけでない外部空間を含めた検討および意匠の検討は御茶屋という空間をより深く追究でき、御茶屋という建築形式の本質により迫ることができると考えられる。

「御茶屋書留」は御茶屋・町茶屋の主屋・付属屋等の規模、材質、塀長さ、垣長さ、屋根形式を知ることができるほか、代官御茶屋役宅とその他役宅の主屋・付属屋等の規模・材質を知ることができる。これにより藩全体を通した御茶屋の建築構成を捉えることが可能となる。

一方、福岡藩における御茶屋の研究は文献史学から近藤典二氏が、福岡藩の御茶屋・町茶屋に関連する史料をまとめ、歴史学の立場からその管理・使用状況について検討している^{注11)}。建築史学からは太田静六氏が民家研究の中で、山家及び三奈木の御茶屋を取り上げ紹介しているが^{注12)}、福岡藩の御茶屋の建築的特徴を体系だてて捉えているわけではない。この様な中で、福岡藩の御茶屋は用途は遊興に使用され、私的に活用されたものと、休泊に使用され、公的に活用されたものに大別でき、所有者は藩主と家臣に大別される。これらの中で福岡藩では圧倒的に藩主の公的に活用された御茶屋が多数を占めることから、本研究は公的に活用された御茶屋を中心に展開する。

よって、本研究は先行研究において史料制約のため未だ解明されていなかった御茶屋の外部空間と内部空間の関連性および意匠構成を把握すること、御茶屋を個別に把握するのではなく、福岡藩という枠組みの中で建築的特徴を明らかにすること、藩に於ける御茶屋という存在を系統だてて捉えること、広範に及ぶ御茶屋の意味の一端を押さえつつ、福岡藩に於ける御茶屋の成立と展開を把握することを目的とする。そして最後に御茶屋という建築類型が何故生まれ、または何故つくられたのかという問題の解決に筋道を付けたい。

本研究の流れを以下に示す。まず平面絵図を基に内野・赤間・山家御茶屋の空間構成を比較検討し、意匠の詳細の把握される絵図を基に内野・赤間の意匠構成を比較検討し、それらを照合し、建築的特徴を捉える。次に福岡藩御茶屋の分布状況を把握しつつ、「御茶屋書留」を基に福岡藩に散在するすべての御茶屋の建築構成、文政5年という一断面の状況を把握する。さらに福岡藩御茶屋に関する史料をまとめ年表を作成し、使用頻度と使用状況を把握しつつ、成立と展開過程を把握する。最後に以上の結果をまとめ、御茶屋が何故つくられたのかという問題の実相に迫りたい。

このうち本稿では福岡藩御茶屋がどのような空間・意匠構成を備え

ていたのかを平面絵図を通して検討する。

1. 福岡藩御茶屋の絵図史料

前述の絵図史料のほか、空間構成が把握できる絵図に享和元年（1801）の「山家御茶屋図」（「山家享和図」と呼ぶ）^{注13)}、文久二年（1862）の「御出会達御間取絵図御笠郡山家御茶屋ノ図」（「山家文久図」と呼ぶ）^{注14)}、年代不詳の「山家御茶屋ニ付奉行出会之節」（「山家奉行出会図」と呼ぶ）^{注15)}、「御茶屋野取図」^{注16)}がある。これらが基本史料となり内野・赤間・山家御茶屋の検討が可能となる。

これらの絵図は、時代の近い史料である「御茶屋書留」の記述内容と建築内容が一致することから、その内容にも信がおける^{注17)}。間取りが部分的にしか描かれない「山家奉行出会図」も、他の山家御茶屋を描く絵図と描かれる部分がほぼ一致し、信憑性は高い。

「内野御茶屋絵図」「赤間御茶屋御家通図」は表現手法が同じで、凡例はないものの、「御茶屋書留」と照合することによって、絵図に記された文言、描かれた図面と色分けからそれらを把握することができる。それぞれ茅葺きを黄色・うぐいす色、瓦葺きを藍色・灰色^{注18)}、建具を赤色の点線と実線で表現し、それぞれ窓と掃き出しの建具を意味していることが知られる^{注19)}。内野はこれ以外の色も使用し、灰色は石を、緑色は植栽、水色は池、無色の縁は上部に屋根を設けないことを表していることが知られる。絵図に書かれた文言とこれらにより内野・赤間御茶屋は空間構成および意匠構成の分析が可能となる^{注20)}。

「山家享和図」は主屋と附属屋の平面形式、部屋名、建具の種類、一部の外構が知られ、付箋からは使用時の人員配置と所作が知られる。建具は赤色の点線と実線で表現し、それぞれ窓と掃き出しの建具を意味する。「山家文久図」は主屋の平面形式、部屋名、出会時の人員配置および仮設間仕切りの配置が知られ、色分けから黄色が畳、灰色が板敷き、緑色が下屋を表していると考えられる^{注21)}。両者は61年の開きから平面の一部に違いが見られるものの、主要な部屋に変化はない。これら二葉の絵図は内野・赤間に比して各部仕上が書かれず、配置も敷地周囲が全て描かれないなど知られる情報に劣る。「山家奉行出会図」は前述のように平面の一部を描くものであるが^{注22)}、「山家享和図」に描かれない東側の垣と塀の存在が知られる。また、山家御茶屋の敷地を描く「御茶屋野取図」からは、池のおおまかな位置と生垣の様相が知られる。

以上の検討結果と絵図を基に、外構を含んだ読取平面図を作成した（図1.2.3）^{注23)}。

2. 福岡藩御茶屋の外部空間構成

御茶屋の敷地は内野・山家は周囲を練塀と生垣で囲い、赤間はこれらに加えて矢来も用い、これら囲繞装置の外側を赤間は藪で囲い、山家は南側道路を介して下代屋敷を4軒並べ、西側に水路を通すなど、閉鎖的な構えを呈していた。

敷地の中は完全に復元できる内野・赤間は塀や垣によっていくつかの空間に区切られる。完全に復元できない山家もこの傾向が窺える。各御茶屋とも敷地中央に主屋を構え、主屋中央に中庭を取ることは共通する。

塀や垣により囲われた空間を最も明確に区分するのが内野御茶屋で、塀や垣により囲われる主屋に面した空間と、塀や垣により囲われる主屋に面しない空間に大別される。前者はA・B・C・Dの四ゾーンに、

後者はa・bの二ゾーンに分けられる。明快に分けられる内野のA・B・C・Dを平面と照合すると、主要な諸室に面しているのに気付く。Aが「御式台」、Bが「上ノ間」、Cが「御居間」、Dが「上・下臺所」に面する。これを基本とし、赤間も区分するとA・B・B'・C・C'・C'・Dの七ゾーンに分けられる。図よりB'・C'・C'はB・Cに付属した空間と捉えることができよう。山家は外構を完全に復することが出来なかったが、緩やかに外部空間が分けられることと、内野・赤間が区分されることに習い、A・B・C・C'・D・D'・D'の七ゾーンに分けた。なお赤間・山家は主屋に面しない囲われた空間はない。

Aゾーンはともに表門を潜ったところに広がる練塀で囲まれた空間で、表御門脇に番所を従え、腰掛・御駕籠部屋を配する。内野は東に厩、中央に雁木・銀杏の木を設ける。

BゾーンはAゾーンから中門・路次を潜った塀と垣で囲まれた空間である。内野はbゾーンを介する。山家はここに池を配する。赤間のB'ゾーンはBゾーンから路次を潜って入った広場である。

CゾーンはBゾーンに隣接する垣と塀で囲まれた空間である。内野はbゾーンを介する。C'ゾーンは赤間は練塀と駕籠塀で囲まれた主屋の「御湯殿」等が面する空間で、山家は「御寝所」等に面する練塀で囲まれた空間である。赤間のC'ゾーンは主屋の「御居間」の南側、駕籠塀と板塀で囲まれた空間である。

Dゾーンは練塀と垣で囲まれた広大な空間で、出入りが可能な場所に番所を設け、池を配する。内野と赤間は小屋・下雪隠を配し、内野と山家は御道具蔵が配される。山家は井戸を2箇所配し、外繁・御厩それに付属し、番所を配する。内野はaゾーンとの境に樹形と番所を設ける。赤間は表御門東に御台所門を設け、敷地東端に隠抜溝を配する。内野はこの空間を生垣・竹垣により緩やかに3つに区分する。これらをD1, D2, D3ゾーンと呼ぶ。山家のD'ゾーンはDゾーンから路次を潜った主屋の台所等に面した練塀で囲まれた空間で、D'ゾーンは次惣詰に面した練塀で囲まれた空間である。

以上、福岡藩御茶屋は閉鎖的な構えを呈し、敷地の中はいくつかの空間に分けられていた。Aゾーンは腰掛や駕籠部屋等を配し、送迎の作法に必要な空間を用意し、Bゾーンは主屋の御広間に面し、Cゾーンは主屋の御居間に面し、Dゾーンは小屋、下雪隠、御道具蔵、池を配し、家政向けの空間を用意していた。またA、B、Cゾーンは表から奥へと順に配され、繋がりのある空間構成となっていた。内野はbゾーンのため例外となるものの、赤間・山家は各ゾーンを通過しないとCゾーンにたどり着けない。

3. 福岡藩御茶屋の内部空間構成

各御茶屋は区分された各ゾーンに対応するように平面をグルーピング出来る。グルーピングは主屋の諸室がどのゾーンに面

図1. 内野御茶屋読取平面図1/600

図2. 赤間御茶屋読取平面図1/600

するかを基本とし、いくつかのゾーンに面する場合や全く面しない場合は建具や壁の配置により決定した。この結果から得られるグループと外部空間構成で検討したゾーンを一体として捉えることが、福岡藩御茶屋の基本空間構成を導き出すと考えられよう。これらは決して部屋名でグルーピングしているわけではない。

Aゾーンに対応するグループの諸室はともに「御式臺」「御玄官」で、送迎の機能を担っていたと考えられ、Aゾーンとこれら諸室を一体とし御玄関空間と呼ぶ。

Bゾーンに対応するグループの諸室はともに「御広間」「次の間」である。内野は「御家老詰所」も対応する。赤間のB'ゾーンは「御廣間」「12畳の部屋(室名不詳)」が対応する。これらは対面とそれを補助する機能を担っていたと考えられ、これらのゾーンと諸室を一体として御広間空間と呼ぶ。

Cゾーンに対応するグループの諸室はともに「又御次」「御次」「御居間」「御上り場」「御湯殿」である。赤間と山家は「奥頭取詰所」が、山家は「御間軒」「御水屋」が対応する。C'ゾーンに対応するグループの諸室は赤間が「御小用所」「御雪隠」「御上段」「御湯殿」で、山家は「御寝所」である。C'ゾーンに対応する諸室は「御居間」「御小用所」「御雪隠」「御上段」である。これらは休息とそれを補助する機能を担っていたと考えられ、これらのゾーンと諸室を一体として御居間空間と呼ぶ。

Dゾーンに対応するグループの諸室はともに「下臺所」「御手水所」である。内野と赤間は「御膳立」「御臺所」「水屋」「小使所」が対応し、赤間と山家は「内証玄官」が対応し、内野と山家は「御代官詰所」が対応し、内野は「御料理人頭詰所」「奥詰所」「御料理所」「荷物所」「御間軒」が対応し、赤間は「行灯部屋」が対応し、山家は「表惣詰」「次惣詰」が対応する。山家のD'ゾーンに対応する諸室は「御膳立」「上臺所」である。これらは管理と家政機能を担っていたと考えられ、これらのゾーンと諸室を一体として詰所台所空間と呼ぶ。さらに内野はD1ゾーンと「御水屋」「御間軒」「御膳立」「奥詰所」「御手水所」「次湯殿」、D2ゾーンと「御代官詰所」「荷物所」「小使所」、D3ゾーンと「御料理人頭詰所」「御料理所」「水屋」「上臺所」「下臺所」をそれぞれ詰所台所空間1, 2, 3と呼ぶ。

以上の結果を基に空間構成を整理し表にした(表1)。

各御茶屋で部屋名が相違するもので、平面上の位置および呼び名から類推される用途が明らかに同じと考えられるものは同じ部屋と見做した^{注24)}。各御茶屋に見える同じ用途の部屋で違うグループに分けられたものに御家老詰所・御間軒・御水屋がある。御家老詰所は御広間、又御次の間の部屋で「山家文久図」からは御広間での御出会時はここに御家老が控え、藩主が御居間へ移動後は奥頭取がここに控えたことが知られ、どちらの空間にも属する用途を有していたことが知られる。この結果、相違が出たと考えられよう。御間軒、御水屋もこのような二重性を持っていたのであろう。

よって福岡藩御茶屋の空間構成は御玄関空間、御広間空間、御居間空間、詰所台所空間の4つに整理され、それから導かれる機能も送迎

図3. 山家御茶屋読取平面図1/600

表1 御茶屋区分表

	部屋名	内野	赤間	山家
空間	御式臺	○	○	○
	御玄関	○	○	○
	御広間	○(上ノ間)	○	○
	次の間	○	○(室名不詳)	-
御居間空間	御家老詰所	○	○	○
	又御次	○	○	○(三ノ間)
	御次	○	○	○
	御居間	○	○	○
詰所台所空間	御上り場	○	○	○
	御湯殿	○	○	○
	御寝所・御次	-	-	○
	御間軒	○	○	○
詰所台所空間	御水屋	○	○	○
	御膳立	○	○	○
	奥詰所	○	○	○
	御手水所	○	○	○
詰所台所空間	次湯殿	○	○	○
	御代官詰所	○	○	○
	荷物所	○	○	○
	小使所	○	○	○
詰所台所空間	御料理人頭詰所	○	○	○
	御料理所	○	○	○
	水屋	○	○	○
	上臺所	○	○	○
詰所台所空間	下臺所	○	○	○
	御内証玄関	-	○	○
	行灯部屋	-	○	○
	表惣詰	-	-	○
詰所台所空間	次惣詰	-	-	○
	御水屋	○	○	○

の場、対面の場、休泊の場、管理・家政の場と4つにわけられ、空間と機能が対応を見せる。

また表から共通して見える諸室を拾うと、御式台・御玄関・御広間・奥頭取・又御次・御次・御居間・御上り場・御湯殿・御水屋・御膳立・御手水所・上台所・下台所がある。これらが基本的な諸室と考えられ、平面形式に福岡藩御茶屋の共通性の存在が知られる。

相違する諸室は、内野が御料理人頭詰所、奥詰所、御料理所、次湯殿を設けること、赤間が御玄関と御広間の間の次の間を広く取り、行灯部屋を設けること、山家が御寝所、御次（御寝所の）、表惣詰、次惣詰を設けることで、内野は詰所台所空間を、山家は御居間空間と詰所台所空間を、赤間は御広間空間を充実させていたことが把握される。よって各御茶屋が特徴を備えていることが窺える。

4. 内野・赤間・山家御茶屋の意匠構成

4つに区分された空間はどのような意匠を呈していたのであろう。

内野・赤間の絵図に見える主屋と付属屋の床仕上、天井仕上、壁仕上、建具と練塀の意匠の文言および使用場所を以下に挙げ、解釈の必要なものは括弧に記した。

建具は「戸」(板戸)^{注25)}「襖」(杉戸)「腰障子」(明障子)「窓障子」(まいら戸)「雨戸」(無双レンシ) (無双連子)「張レンシ」(張連子)「引上戸」(掛戸)「大戸」があり、襖戸、杉戸、板戸が内部間仕切りに、その他が外部との境に配される。床仕上は「七島」「七島耳絶」(縁のない七島表畳)「石見」(拭板)「スノコ」(竹エン)があり、竹仕上は縁に用いられる。壁仕上は「白土」(白漆喰壁)「錆土」(錆土壁)「中塗込」(中塗壁)がある。天井仕上は「板天井」(竿縁天井)^{注26)}「板天井煤色付」(煤色付竿縁天井)「天井なし」がある。家具は「イロリ」(ナガシ)「竈」(戸袋)がある。屋根仕上は「茅」^{注27)}「欠略瓦」(棧瓦)^{注28)}「目板瓦」がある。塀・垣には「練塀」(駕籠塀)「板塀」(竹垣)「杉生垣」(山茶花垣)「矢来」がある。

また、絵図から意匠を詳細に把握できない山家は「江戸参府紀行」^{注29)}から内部意匠が知られ、御居間・二ノ間の間は六枚の襖、天井板は杉、壁は貝殻石灰で、御居間を桃色、二ノ間を黄土色とし、襖意匠は御居間側を金色、二ノ間側を花模様、襖縁は黒漆とし、御居間は一フィート高くしていたと伝え、御居間が上段であったことが知られる。

これら文言から把握される意匠がどの部分に使用されていたのかを表にまとめた(表2)^{注30)}。この表からは、内野・赤間・山家の意匠構成がほぼ一致を見ることが知られ、その中でも詳細を知れるのが内野であることが把握されよう。表には例外が見られるものの、内外部の意匠を以下のように特徴付けることができる。

御玄関空間は外部に白壁の棧瓦葺き練塀を巡らし、内部は竿縁天井、白漆喰壁、襖戸で特徴付けられ書院造の意匠を呈する。御広間空間は外部に中塗壁の目板瓦葺き練塀を巡らし、内部は竿縁天井、白漆喰壁、襖戸で特徴付けられやや砕けた書院造の意匠を呈する。御居間空間は外部に中塗壁の目板瓦葺き練塀を巡らし、内部を錆土壁と煤色付竿縁天井で特徴付けられ数寄屋風^{注31)}の意匠を呈する。詰所台所空間は外部に杉生垣・竹垣を巡らし、内部は板戸、中塗壁、縁なし畳または拭板で特徴付けられ民家風^{注32)}の意匠を呈する。

さらに、内野の詰所台所空間1は外部に杉生垣を巡らし、内部は竿縁天井、白漆喰壁、縁のある七島畳、板戸で特徴付けられ、詰所台所空間2.3は外部に杉生垣、竹垣、棧瓦中塗仕上の練塀を巡らし、内部

表2 御茶屋意匠構成表

空間分類	部屋名	床仕上	天井仕上 (屋根材)	壁仕上(内)	壁仕上(外)	建具	その他
内野	玄関空間	御式台	拭板	竿縁天井	白土壁	襖戸	床の間 (拭板)
		御玄関	七島表畳	竿縁天井	白土壁	襖戸、板戸	床の間 (拭板)
		練塀	—	(棧瓦)	白土壁	—	—
		腰掛	—	(茅)	白土壁	—	—
		香所	—	(茅)	白土壁	—	—
	御広間空間	御広間	石見畳	竿縁天井	白土壁	襖戸	床の間
		次の間	石見畳	竿縁天井	白土壁	襖戸	—
		御家老詰所	石見畳	竿縁天井	白土壁	襖戸	—
		中書隠1	拭板	—	—	板戸	—
		中書隠2	拭板	—	—	板戸	—
赤間	玄関空間	御式台	拭板	竿縁天井	白土壁	襖戸	床の間 (拭板)
		御玄関	七島表畳	竿縁天井	白土壁	襖戸、板戸	床の間 (拭板)
		練塀	—	(棧瓦)	白土壁	—	—
		腰掛	—	(瓦)	白土壁	—	—
		香所	—	(茅)	白土壁	—	—
	御広間空間	御広間	石見畳	竿縁天井	白土壁	襖戸	床の間
		次の間	石見畳	竿縁天井	白土壁	襖戸	—
		御家老詰所	石見畳	竿縁天井	白土壁	襖戸	—
		中書隠1	拭板	—	—	板戸	—
		中書隠2	拭板	—	—	板戸	—
山家	玄関空間	御式台	拭板	竿縁天井	白土壁	襖戸	床の間 (拭板)
		御玄関	七島表畳	竿縁天井	白土壁	襖戸、板戸	床の間 (拭板)
		練塀	—	(棧瓦)	白土壁	—	—
		腰掛	—	(瓦)	白土壁	—	—
		香所	—	(茅)	白土壁	—	—
	御広間空間	御広間	石見畳	竿縁天井	白土壁	襖戸	床の間
		次の間	石見畳	竿縁天井	白土壁	襖戸	—
		御家老詰所	石見畳	竿縁天井	白土壁	襖戸	—
		中書隠1	拭板	—	—	板戸	—
		中書隠2	拭板	—	—	板戸	—

／は文字情報なしを表す。－はそれ自体が存在しないことを表す。

は天井なし、中塗壁、縁のない七島畳、板戸で特徴付けられる。

床の間は御玄関、御広間、御居間に3御茶屋とも備え、御玄関の床の間は1間半〜2間と幅広くする。山家は御寝所にも床の間を設ける。床の間が御玄関空間・御広間空間・御居間空間の3カ所に存在することから、それぞれの空間で異なる使い方があったと考えられる。

3御茶屋で相違する意匠は御玄関空間付属屋を赤間が瓦葺きとするが他は茅葺きとすること、上台所の床仕上を内野は拭板、他は畳とすること、上台所の天井仕上を内野は天井なし、赤間は竿縁天井とすること、中坪の壁仕上を内野は白漆喰壁、赤間は中塗壁とすること、座敷意匠を山家は御居間に付書院・天袋を設け、上段とし、御居間意匠を充実させていたことが挙げられる。

以上、御玄関空間は書院造を基本とし、幅広の床の間を備えた格式高い意匠を呈し、送迎の場が用意され、御広間空間も書院造を基本とするが、練堀を中塗壁目板瓦とやや砕けた意匠を呈した対面の場が用意され、御居間空間は数寄屋風意匠を基本とした寛いだ意匠を呈し、休泊の場が用意され、詰所台所空間は民家風意匠を基本とする質実な意匠を呈した詰所・家政の場が用意されていた。よって空間と機能と意匠とが明快に区分されると言えよう。相違点は少なく、内野の上台所が質素であることと、山家の御居間意匠の充実が挙げられる。

小結

本稿では、福岡藩御茶屋の建築的特徴を明らかにするため、内野・赤間・山家御茶屋の平面絵図を基に読取平面図を作成し、それぞれの共通点と相違点および外部と内部の関係に着目し、考察を行った。

外部空間を考察することで、3御茶屋の配置構成が合致し、敷地周囲に囲繞装置を設け、さらに敷地外周を藪・下代屋敷・水路で囲うなど閉鎖的な構えを呈し敷地中央に主屋を構え、主屋中央に中庭を取り、敷地の中は塀や垣により大きく4つのゾーンに区分され、ヒエラルキッシュな空間構成とすることが明らかとなった。

また、外部空間の結果から内部空間を考察することで、御玄関空間・御広間空間・御居間空間・詰所台所空間の4つの区分が導き出され、内部と外部が一体的に捉えうることを指摘した。

さらに3つの平面を比較することで、平面形式に共通性が見いだせるとともに、内野が御料理所等を設け詰所台所空間を充実させ、赤間が次の間を広く取り御広間空間を充実させ、山家が御寝所、惣詰等を設け御居間空間、詰所台所空間を充実させ、場所の違いにより個性を持つことも明らかとなった。

最後に意匠構成を考察することで、御玄関空間が書院造を基本とした格式高い意匠を呈し、御広間空間も書院造を基本とするが、やや砕けた意匠を呈し、御居間空間が数寄屋風意匠を基本とした寛いだ意匠を呈し、詰所台所空間が民家風意匠を基本とする質実な意匠を呈し、外部をも含めた空間が4つの異なるコンセプトで成立していることが明らかとなった。

先行研究の萩藩・庄内藩と平面構成を比較すると、萩藩・庄内藩と福岡藩は、萩藩・庄内藩における番所部分は御玄関空間と詰所台所空間に、御座間部分は御居間空間に、台所部分は詰所台所空間に対応する諸室がみられ共通性が見いだせる。また、福岡藩では御式台、御玄関を用意するのに対し、萩藩・庄内藩では必ずしもこの両方を用意せず、福岡藩では御広間を必ず設けるが、萩藩ではほとんど設けず、設けた場合も福岡藩と空間構成が全く違い、福岡藩御茶屋は対面の場に

相応しい表向きの空間の御玄関空間、御広間空間が充実する点に、藩主の宿舎として機能した福岡藩御茶屋の特色が見出せる。萩藩にこれらが見当たらないことは御茶屋敷地に勘場が設けられていたことに関係すると考えているが、これらの問題は次稿以降の課題としたい。

注

- 注1) 川上貢「茶屋の意味について」『日本建築史論考』中央公論美術出版、1998)
- 注2) 丸山舜成『日本近世交通史の研究』(吉川弘文館、1989) 等
- 注3) 中島義一「御殿と御茶屋」『季刊地域』11、1982) 等
- 注4) これらの他に、井出隆正『近世豊前国小倉藩における「御茶屋」について』(平成11年度京都工芸繊維大学大学院修士学位論文)、林一馬「時津茶屋(本陣)屋敷の遺構調査」『日本建築学会九州支部研究報告』41、2002)がある。井出氏は小倉藩の御茶屋全体を取り上げ、一つ一つの御茶屋に関して史料を整理し、御茶屋は多種多様で、細川期は遊興的で小笠原期は交通的であるとし、御茶屋は座敷部と家政所に分けられ、寝所が座敷と併用されていたとされる。
- 注5) 川上貢「永原御茶屋の建築」『日本建築史論考』中央公論美術出版、1998)
- 注6) 岡田悟「毛利藩における三田尻御茶屋について」『日本建築学会計画系論文報告集』444、pp127〜137、1993.2) 岡田悟「毛利藩主国廻り時の休泊に用いられた御茶屋について」『日本建築学会計画系論文報告集』464、pp181〜189、1994.10) 等
- 注7) 岡田悟「庄内藩における清川御茶屋について」『日本建築学会計画系論文報告集』485、pp173〜182、1996.7) 等
- 注8) 「内野御茶屋絵図」(文化8年、安田家久家蔵)
- 注9) 「赤間御茶屋御家通図」『林文書』天保5年、福岡県地域史研究所蔵)
- 注10) 「御茶屋々々御家評数其外口々書留メ在役衆役宅坪数共」(文政5年、『林文書』福岡県地域史研究所蔵)「御茶屋書留」は外構に関する情報を記載し、内部についてはほとんど書かれていない。
- 注11) 近藤典二「福岡藩の御茶屋と町茶屋」『西地域史研究』8、1994)
- 注12) 太田静六「福岡県の民家とその周辺」(九州大学建築学教室、1973)
- 注13) 「山家御茶屋絵図」(『三奈木黒田家文書』享保元年、九州文化史研究所蔵)
- 注14) 「御出合達御間取絵図御笠郡山家御茶屋ノ図」(文久2年、『須藤家文書』)
- 注15) 「山家御茶屋二付奉行出合之節」(『三奈木黒田家文書』九州文化史研究所蔵)
- 注16) 「御茶屋野取図」『山家地区史跡整備調査報告1』(2001)
- 注17) 「御茶屋書留」と照合すると、上屋・下屋の面積が一致し、付属施設の規模も一致し、向史料の信憑性は高い。
- 注18) 「御茶屋書留」より屋根材料は上屋を茅葺き、下屋を瓦葺きとすることが知られる。
- 注19) 赤い点線部分には窓、外部に引上戸もしくは掛戸等、実線部分には襖、戸等の文言が見え、窓、掃き出しの建具を表していることが容易に把握できる。
- 注20) 赤間の絵図は内野にある量の種類の表記がなく、図面中央には破損で読み取れない部分があり、文言より御殿・材木小屋・表御木戸・裏御門が絵図に描かれる範囲外に存在したことが把握される。
- 注21) 「内野御茶屋絵図」「赤間御茶屋御家通図」との比定から考えられる。
- 注22) 「山家奉行出合図」は年代不詳であるが山家御茶屋は享和から文久にかけて雪隠が増築され、御間庫が御水屋になる。この図には雪隠と御間庫の両方が見られることから享和元年(1801)以降文久二年(1862)以前の状況を描くと推察される。
- 注23) 山家に関しては「山家享和図」を基本とし、外構の一部は作成できていない。
- 注24) 以下、表1に整理した部屋名を使用する。
- 注25) 「戸」は襖、障子、舞良戸以外であることから板戸と解釈できる。
- 注26) 内野御茶屋は明治三年に廃止されたが、明治五年に至って西光寺の庫裏として御茶屋の一部が移築され、それが現存する。移築に際し、瓦葺きに改められたものの、遺構の平面・断面の測及及び痕跡調査の結果、軸組は御茶屋の部材が残されることが判明した。現存するのは「内野御茶屋絵図」に見える「御次」「御居間」と「下臺所」「上臺所」の部分であることが確認できた。これによって主屋の主要部をなす座敷棟と台所棟の断面構成が知られ、「御居間」に欄間・長押が存在したこと、上段の間でないことが確認され、「板天井」が竿縁天井を表すことも知られた。
- 注27) 「御茶屋書留」による。
- 注28) 簡略瓦の意として棧瓦と解釈する。
- 注29) 斎藤信次『江戸参府紀行』(東洋文庫、1967)
- 注30) 御広間空間の雪隠を中雪隠、詰所台所空間の雪隠を下雪隠としている。呼称は「御茶屋書留」による。
- 注31) 数寄屋風は平井聖『日本住宅の歴史』(日本放送出版協会、1974) p168に「数寄屋の影響を受けた書院を、数寄屋風の書院と呼ぶことにする。また、その特徴をなす意匠を数寄屋風の意匠と名付ける。」と定義され、これを援用する。
- 注32) 民家風は民家の書院座敷を除いた部分に特徴的にみられる意匠を指す。

(2005年9月10日原稿受理、2006年1月16日採用決定)